

私の保育

大多和 檀

「私の保育」とは一体どんなものだろう。私は、「保育」もしながら六年と十ヵ月たち、現に「私の」保育を受けた子どもたちが〇〇人といるのでから「私の保育」、そんなものないわ」ではすまされませんが、「では、あなたはどのように指導し、やっているのですか」と聞かれた時に

「えーと、あのお、だんだんところなってきたので……」

「だんだんってどんなふうにですか」

「気づいたらなっていたんです」

というのが多分に私の保育のようです。

そのためにはどのような手だてを考えたのか、まただんだんとなっていく、その「だんだん」をはっきりさせる必要性をすぐ感じていますが、ここでは「私の保育」の一つの構成部分である、私の「保育観」みたいなことを話したいと思います。―「私の保育」は、（実際の指導の手だて）＋（保育観）＋（自分の性格）↓保育観の中にも含まれますが、もっと実際の行動の時に表わ

れるようす）から成り立っていると思うので――

七年前、幼稚園の先生になろうと決心したのは、私にとってこの仕事は、子どもたちと遊んでいると、生きていくうえで一番基礎的な大事なこと―人間と人間の関係について―が学べる、というところでした。

それで、幼稚園とは、教師と子ども、子どもと子どもの、一緒にいて楽しいという人間関係をつくっていく、教師も子どもも自由でのびのびと―自分は自分らしくその場の現実をよく見て行動ができる―していたい、と考えていました。

「自由」とはどういうことだろう、「真の自由」とは、とよく考えさせられた時期です。自分は自分らしく、その場の現実をよく見て行動するということは、自分のことばで物を考える、ということだと思ふし、子どもたちより、大人がもっとも自分のことばで物考えたなら、子どもたちの前を歩く、大人になったらそれでもういいとすら感じます。

——最近「アラバマ物語」を読んですっかりこの本が気に入ってしまいました。それは、お父さんがちゃんと、お父さんとして生きています。このお父さんは「アティカス」といいますが、アティカスがある事件で、黒人の弁護をすることになると、子どもたちが学校でいわれるのです。「君のお父さんは、ニ、グ、ロの弁護なんかしているんだぞ」そしてその子どもはお父さんに聞くのです。「なぜそんなことをするのか」と。アティカスはいいいます。

「第一もし、私がそれをしなければ、私は大きな顔をして町を歩けないんだ。…(略)…お前やジェムにむかって、二度とこんなことやっちゃいけないなんておしえる資格もなくなるんだ」

「二度と再び、私のいうことを聞きなさい、なんてお前に口はばつたいことをいえないじゃないか」

そうだ、そうなんだという気持ちがあるのに私の中に広がったことか……。

私の好きな「おやすみなさいフランシス」や「ふくろ小路」番地、「インガルス一家物語」にも、そんな大人が出てきます。

——けれどもこのことは決して「楽しい」ことではないし、その前には、他の人も自分と同じに思っているというか、自他の区別のついていない段階では、当然いろんなぶつかり合いも起こって来るし、またどしどし起こってくることを望みます。(そこから

次へと進んでいくのですから)それで「楽しい人間関係をつくる」の「楽しい」は抜きました。

今は、「関係的に存在している」ことを学ぶ場としてとらえ、これは遊び(≡生活)を通して、その中で

●子ども自身が、○○したいということが出せること(教師は、その子どもが本当にやりたいことは実現させたい)

●ほかにもいろいろ、○○したいと思っている人がいることを知っていく

●そのちがっている人たちと一つのことをやりとげることができきる つまり、

何かを好きになる

自分の目で見て、考えて行動できる } 人間像
他の人のことも考えることができる

をえがいています。

このことは私自身にも課せられたことで、幼稚園というワクの中だけでなく、大げさに言えば生き方についての自分の考えでもありますから、当然、私自身はどうなのかということが問われます。きまずし、そうなる生き方の一つの大きな価値感があり(ある意味では一つの大きな価値感があることは大事なことだけ)それのみが当然の生き方であり、その面からのみ人間を見ていくこ

の世の中では、ことごとく、とはいかなくても、何をするにも現実の拒否にあり、このことは、そこで「なぜか」と考えさせはするけど、この連続ということはやっぱり「ああ、しんど」……

したがって私の保育とは、「ああ、しんど」になってしまい、一時は、もうやめよう、他の仕事に変わってしまったえ、とよく職業欄をながめていた時もありました。でもなぜだか今は、保育の場では「自由にのびのび」としている私なのです。

一体どうしてなのか、と思うと、「では私自身はどうなのか」という発想ではなく、自分のことばで物を考える、つまりあるがまま、私は私としてやるしかない、と「開き直った」からかもしれません。ちょうど、子どもの友十月号の「やっぱりおおかみ」の終りの方の場面で、「やっぱりおれは、おおかみとして生きるしかないんだ。なぜかそう思ったらふしぎにゆかいな気持ちになつてきました」に近い気持ちなのかもしれません。私は私としてやるしかない、が「私の保育」なら、私としてやる保育とはどういう保育なのか、結局、うまく言語化できなかったみたいです。「私の保育」は幼稚園にいらして見てください、になってしまいそうです。要するに、このような保育観をもちながら、そして全くまだよく整理されていないのですが、「生活を通して」の生活とは、

生活とは↓生きること

←

遊ぶこと

●遊びに必要な

ものを創り出す

●遊びを創り出す

←

一人ではなく

友達といっしょで

約束ごとが生じ

る(仕事)

動物と遊ぶ↓動物の世話

食事をおやつをたべる↓したく

そうじ・片づけ

- 体を動かす
- 音楽が体の中にある
- 絵が体の中にある
- 他の人と話をする、話を聞く
- ことば
- ことば以外で(感じとる)

表現する

とこのようなイメージをもちながら、実際には、多分に無計画で、偶発的で、この四、五歳の時には何を育てたいのか、何が大事なのか、子どもの発達を生活を保障するというのは、どういうことなのか、とわからないだらけの問題をかかえ、自分をさらけ出して子どもたちと生活しているのが「私の保育」のようです。終りに、「保育」からは離れますが、「私」を知っていただくために、もう一つ、好きな本、として「ソロモンの指輪」ーコンラート・ロレンソーを紹介します。(港区立中之町幼稚園)